

ハンドボール競技における戻り局面での積極的防御に関する考察
Consideration on active defense in the back check in Handball games

伊藤 寿浩¹⁾ 永田 匠²⁾ 杉森 弘幸³⁾ 下川 真良⁴⁾

Toshihiro Ito¹⁾ Takumi Nagata²⁾ Hiroyuki Sugimori³⁾ Masayoshi Shimokawa⁴⁾

1) 愛知大学地域政策学部

Faculty of Regional Policy, Aichi University

2) ゼビオホールディングス株式会社

Xebio Holdings Corporation

3) 岐阜大学教育学部保健体育講座

Department of Physical Education, Faculty of Education, Gifu University

4) 大阪体育大学体育学部

Faculty of Physical Education, Osaka University of Health and Sports Sciences

キーワード：積極的防御, 移行局面, 記述的ゲームパフォーマンス分析, 印象分析

I. 緒言

ハンドボールは、ゴール型球技として分類される(H. Döbler 1985)。さらにゴール型球技は、定められた空間において、敵味方が入り乱れて攻防が展開される「混戦型」であることがその特徴とも言える。ハンドボールの指導の現場においては、その「混戦」を整理し、ゲームをより深く理解するために、ゲームの局面を取り上げた戦術トレーニングがされることが多くある。加えて、ゲーム分析の視点においても同様に、局面を整理しゲームを分析していくことが一般的となっている。

大西²⁾は、ハンドボールのゲームは18の基礎局面から構成されていると述べている。その詳細は、「組織攻撃」と「組織防御」の組織的な局面を10局面、「速攻」と「速攻防御」の移行局面を8局面設定している(大西1997)。さらに、佐藤³⁾は、攻撃(速攻・遅攻)

と防御(速攻の防御・遅攻の防御)を時間経過に伴ってそれぞれ「準備局面」、「展開局面」、「終結局面」の3局面に区分けした(佐藤2000)。

これらの局面構造の中でも、自陣から敵陣へとボールを運ぶ局面すなわち移行局面(速攻および速攻防御)は、ゲームを優位に運ぶ上で重要な局面であるとされている。しかし、速攻防御局面に関するデータや研究は少なく、主要4局面(組織攻撃、組織守備、速攻、速攻防御)の中で最も未発展の分野であると考えられる。

近年、ハンドボールにおける世界トップレベルのゲームでは、移行局面において、ボール喪失後、素早く自陣で組織的な守備を敷くのは対照的に、複数人のプレイヤーが敵陣に残りプレッシャーをかけるなどの積極的な防御活動が多くみられる。D. Constantini⁴⁾

はフランス代表監督時代に、「速攻防御局面」において、この積極的な防御戦術を採用し、今日のハンドボールに大きな影響を与えた (D. Constantini 2003)。一方で、I. Kunst-Ghermanescu⁵⁾は、「相手の速攻開始が明らかになった場合には防御ポジションの配置を考慮することなく、自陣のゴールエリアラインまでの最短距離を最大スピードで防御プレイヤーは帰陣しなければならない」、「攻撃権移行直後にボールに最も近い防御プレイヤーはボール保持プレイヤーに制限をかけ、帰陣と防御の再組織に必要な時間を獲得する戦術手段を挙げているが、複数の防御プレイヤーが速攻の妨害に出る戦術は、防御プレーの原則に矛盾するもの (I. Kunst-Ghermanescu 1981) であると述べている。

そこで本研究では、これら速攻守備局面における対立する著名な指導者の意見に対し、積極的な防御活動の立場に立って、その有効性を検討することとする。また、山崎ほか (1997) が大学女子のカテゴリーを対象にし、移行局面での積極的な防御活動の有効性について報告しているものの、国内のゲーム場面では依然として、積極的防御活動が重要視されていない現状がある。本研究において、積極的防御活動が相手の速攻に及ぼす影響について明らかにすることで、新たなゲーム戦術指導論確立の一助となることを目的とする。

II. 研究方法

(1) 調査対象試合 (表 1)

2015年8月9日～13日に開催された西日本学生ハンドボール選手権大会の男子準々決勝及び準決勝、インカレ出場権決定戦の試合 9 試合と 2015年11月7日～11日に開催された全日本学生ハンドボール選手権大会男子準々

決勝以降の試合 7 試合の計 16 試合とした。なお、対象試合の条件を整えるために各試合の延長戦は分析の対象外とした。

表 1 調査対象試合の対戦表及び結果

| 大会名 | 日付 | 対戦相手および試合結果 | |
|--------------|--------------|--------------------|-----------------|
| 西日本学生選手権 | 2015. 8. 11 | インカレ 出場権 決定戦 | OK大学 29-17 GS大学 |
| | | | DS大学 32-27 TR大学 |
| | | | F大学 27-23 AK大学 |
| | 2015. 8. 12 | 準々決勝 | K大学 26-23 D大学 |
| | | | A大学 30-27 OT大学 |
| | | | CK大学 21-15 MG大学 |
| 2015. 8. 12 | 準決勝 | K大学 34-30 A大学 ※ | |
| | | CK大学 22-19 CB大学 ※ | |
| 全日本学生選手権 | 2015. 11. 09 | 準々決勝 | N大学 22-19 CK大学 |
| | | | NT大学 33-29 KG大学 |
| | | | W大学 30-26 D大学 |
| | | | T大学 35-23 A大学 |
| | 2015. 11. 10 | 準決勝 | NT大学 31-24 N大学 |
| | | | W大学 42-33 T大学 ※ |
| 2015. 11. 11 | 決勝 | NT大学 33-29 W大学 | |

※は延長戦に入った試合

(2) 記述的ゲームパフォーマンス分析時の観察項目 (図 1)

① ボール獲得局面およびボール喪失

攻撃権移行の発生要因である、最終プレーが行われる局面である。吉井⁶⁾はバスケットボール競技における速攻の分類方法の一つとして、ボールの所有転換原因別による分類 (吉井 1987) を挙げており、これに従って分類した。

② 速攻の開始局面および戻りの準備局面、展開局面

球技における行動は、「行動するプレイヤー

＝味方のプレイヤー＝敵のプレイヤー」という三者間の直接的な関連性が行動要因の一つである(H. Döbler 1985) ことに従い、最初にボールを処理するプレイヤー(以下, **First Player**)と **First Player** からボールをもらうプレイヤー(以下, **Second Player**)に着目し、**First Player** のボール保持後と **Second Player** のボール保持前・ボール保持後において、防御が行われたか否かを観察した。さらに、自陣へ帰陣する過程において、攻撃プレイヤーに正対し、攻撃プレイヤーに影響を与えたものを積極的防御とした。また、自陣から敵陣へボールを運ぶ攻撃プレイヤーに対し、どのような防御行動を行っているか分析することとした。観察項目については、H. Döbler (1993) や佐藤 (2000) の戻り局面における防御行動を参考にし、設定した。

速攻開始時における **First Player** の位置を以下の項目に設定した。

- 1) **Goal Are**(ゴールエリアラインとアウトアールラインで囲われた空間),
- 2) **Defense Area**(ゴールエリアラインとフリースローラインで囲われた空間)
- 3) **Transition Area1**(フリースローラインとセンターラインで囲われた空間)
- 4) **Transition Area2**(センターラインとフリースローラインで囲われた空間)
- 5) **Break Area**(フリースローラインとゴールエリアラインで囲われた空間)

③速攻の展開局面

ボールを自陣から敵陣へと運ぶ局面である。大西¹⁾は、ゲーム場面において先述の基礎局面すべてが時間経過に伴い現れるのではなく、攻防状況に応じて、ある局面を経過しないで移行したり、途中から別の局面へと移行する

場合もある(大西 1997)と述べている。したがって、この局面においても同様に、防御側プレイヤーの帰陣よりも早く敵陣に侵入し、数的優位状況で突破する場合は、展開局面を経過しないこともある。

④速攻の終結局面および組織防御への移行

シュート直前の突破とシュートを行う局面である。

1)速攻の最終プレイについて

ここでは、速攻局面の最終プレイを5つの項目を設定し分析した。攻撃側の速攻の成功をシュートとペナルティースロー獲得と定義・分類し、反対に、ボール操作ミスやオーバーステップなどの規則違反、インターセプトなどを速攻の失敗と定義・分類した。

さらに、攻撃側の突破やシュートに至る以前に、守備側がフリースローをとりに行くことやボールの行方を阻んでボール奪取もしくはボールデッドさせるなどの防御活動がこの終結局面にあったか否かも併せて分析した。

また、b 防御側の意図とは別に、攻撃側が速攻を中断した場合には、すべて攻撃側の意図的中断によるものとした。

2)速攻の種類について

速攻の種類を1次速攻、2次速攻、3次速攻の3つに分類し、分析した。

3)臨時の防御システムについて

状況に応じて瞬時に行われる臨時の防御(組織防御とは異なる臨時のシステム)の有無とそのシステムを分類し、分析した。さらに「速攻の展開」における防御形態を敵陣からセンターラインまでの前方防御と9mからセンターラインまでの中盤防御、9m内の後方防御に分類し、分析した。

| | |
|---|--|
| File No. _____ | |
| 攻撃と防衛の人数 1.6-6 2.6-5 3.5-6 | ③: 速攻の展開 |
| 4.その他 (-) | ・フロントコートへのボールの運び方 |
| 1. ボール獲得 | 1. First Playerによる突破 |
| 1.相手の得点 | 2. 第1陣での連携 |
| クイックスローオフの有無 1)有 2)無 | 3. 第1陣・第2陣による連携 |
| 2.シュートミス | 4. 第2陣によるボール運び |
| 1)OKセーブ <input type="checkbox"/> コントロール | ・展開時のボールマンに対する防衛の動き |
| <input type="checkbox"/> 非コントロール | ※複数選択可 |
| 2)シュートアウト <input type="checkbox"/> コントロール | <input type="checkbox"/> 特になし |
| <input type="checkbox"/> 非コントロール | <input type="checkbox"/> コート中央から外側に追いやる |
| 3)シュートブロック | <input type="checkbox"/> シュートコースを防ぎパスさせる |
| 3.ボール操作ミス | <input type="checkbox"/> ボディコンタクト |
| 4.規則違反 | <input type="checkbox"/> 牽制(パスコースに入る) |
| 5.インターセプト | <input type="checkbox"/> その他(_____) |
| 6.その他(_____) | |
| ②: 速攻の開始局面 <input type="checkbox"/> 速攻の意思無し | Second Player |
| First Player | <ボール保持後> |
| (速攻開始時に最初にボール処理したプレイヤー) | ・Second Playerに対する防衛の有無 1.有 2.無 |
| ・速攻の開始位置 1.GA 2.DA 3.TA1 | ・プレーの選択 1.突破+シュート |
| ※図1参照 4.TA2 5.BA | 2.第1陣へのパス |
| ・プレイヤーの種類 1.OK 2.CP | 3.第2陣へのパス |
| ・プレーの選択 | 1. 第1陣へのパス |
| 1. 第1陣へのパス | 2. 第2陣へのパス |
| 2. 第2陣へのパス | 3. ドリブル突破 |
| 3. ドリブル突破 | 4. ドリブル→第1陣へのパス |
| 4. ドリブル→第1陣へのパス | 5. ドリブル→第2陣へのパス |
| 5. ドリブル→第2陣へのパス | |
| ・First Playerに対する防衛の有無 1.有 2.無 | ④: 速攻の終結 |
| ・第2陣に対する防衛の動きの有無 1.有 2.無 | ・速攻の最終プレー |
| Second Player | 1.シュート 1)成功 2)失敗 3)PT獲得 |
| (First Playerからパスを受けたプレイヤー) | 2.ボール操作ミス |
| <ボール保持後> | 3.規則違反 |
| ・速攻の役割 1.第1陣 2.第2陣 | 4.インターセプト |
| ・Second Playerに対する防衛の有無 1.有 2.無 | 5.速攻の中断&速攻への移行 |
| | 1)フリースローによる中断 |
| | 2)パスカット&スローインによる中断 |
| | 3)攻撃側による意図的中断 |
| | 4)その他(_____) |
| | ・速攻の種類 |
| | 1.1次速攻 |
| | 2.2次速攻 |
| | 3.3次速攻 |
| | 4.特殊プレー(クイックスタート) |
| | 5.その他(判別不可能) |
| | ・臨時の防衛システム |
| | 1.0-0-6 2.1-0-5 3.2-0-4 4.3-0-3 5.0-1-5 |
| | 6.0-2-4 7.0-3-3 8.1-2-3 9.1-1-4 |
| | 10.その他 |

図1: 速攻開始時の位置

図1 観察項目のチェックシート

III. 総計処理

データの処理については、独立性の検定を用い、有意差が出た分析項目においてはさらに残差分析によって有意差を求めた。以上の統計解析には、エクセル統計 2010 (SSRI社製)を使用した。なお、本研究における統計的有意水準は全て5%未満とした。

IV. 信頼性の検討

上記の方法で得られた分析記録の信頼性を求めるために、研究者自身とトップコーチ2名(A. 日本スポーツ協会公認コーチ・大学男子チーム指導8年間、B. 日本スポーツ協会公認コーチ・大学女子チーム指導を5年間)、計3名の観察者間の一致率から検討し、行動観

察研究において必要とされる信頼性はすべてのカテゴリーにおいて確保することができた。

V. 結果および考察

(1) 戻り局面におけるゲーム様相

速攻防御の失敗は、速攻最終プレイの結果が「得点」、「7mPT」、「警告・退場」を伴う速攻中断の合計であり、それ以外の結果を速攻防御の成功と位置付けた。また、ボール保持しているプレイヤーに対する防御活動は、「DFファール」、「ボディコンタクト」、「詰め」のいずれかであること、ボールを持っていないプレイヤーに対する防御活動は、「牽制」、「インターセプト」のいずれかであることと定義し、これらを積極的な防御と位置付けた。

さらに、First Player に対する防御が「フリースローによる再開」や「GK が First Player」となる場合は、ボール保持プレイヤーに対する防御活動がルール上不可能であるため、除外した。

注) PT・・・ペナルティスロー

DF・・・ディフェンス

①First Player に対する防御と速攻最終結果の関係 (表 2)

First Player に対する防御の違いと速攻防御の関係においては、有意な差が認められなかった。速攻の起点となる First Player に対する防御の生起数が少ない要因として、ボールの所有転換の状況が挙げられる。すなわち、ボールの所有転換要因は、攻撃側の意図的なプレイ (シュート) と偶発的なプレイ (ボール操作ミス、規則違反など) に分類され、特に偶発的なプレイによりボールの所有転換が起こった場合、予測的な守備への切り替えが困難である。そのことにより、First Player に対する意図的な防御の生起数が少なかったと推測される。

表 2 防御の有無と速攻最終結果の生起数

| | 防御成功 | 防御失敗 | 計 |
|------------|------|------|-----|
| CP - 積極的防御 | 22 | 44 | 66 |
| CP - 消極的防御 | 101 | 146 | 247 |
| 計 | 123 | 190 | 313 |

②Second Player に対する防御 (ボール保持前) と速攻最終結果の関係 (表 3)

Second Player に対する防御の違いと速攻防御との関係において有意な差が認められた ($X^2=p<0.01$)。First Player への防御とは異なり、守備に転じる時間的余裕から、ボールの行方を予測し、牽制やインターセプトを狙うことにより、ボールの展開を阻止できたと考えられる。

表 3 防御 (ボール保持前) と速攻最終結果

| | 防御成功 | 防御失敗 | 総計 |
|------------|-------|-------|-----|
| CP - 積極的防御 | 24** | 2** | 26 |
| CP - 消極的防御 | 446** | 251** | 697 |
| 総計 | 470 | 253 | 723 |

(** $P < 0.01$, * $P < 0.05$)

注) CP・・・コートプレイヤー

③Second Player に対する防御 (ボール保持時) と速攻最終結果の関係 (表 4)

Second Player に対する防御の違いと速攻防御との関係において、有意な差が認められなかった。今回対象とした試合は速攻の開始局面および展開局面においてバックコートに素早く帰陣する防御戦術を採用しているチームが多く、攻撃権喪失に関わったプレイヤーがバックコートに帰陣する過程において突発的に防御行動を行ったものと推測できる。

表 4 防御 (ボール保持時) と速攻最終結果

| | 防御成功 | 防御失敗 | 総計 |
|------------|------|------|-----|
| CP - 積極的防御 | 58 | 40 | 98 |
| CP - 消極的防御 | 386 | 212 | 598 |
| 総計 | 444 | 252 | 696 |

④第 2 陣に対する防御と速攻最終結果の関係 (表 5)

速攻の局面において、相手プレイヤーのシュート動作などを見極め早い時期に速攻にできることのできるプレイヤーを第 1 陣とし、その第 1 陣を追いかけるプレイヤーを第 2 陣と定義した。その第 2 陣に対する防御の違いと速攻防御との関係において有意な差が認められた ($p < 0.01$)。第 2 陣に対する防御は攻撃権喪失に関わった攻撃最終プレイヤーやポストプレイヤー、サイドプレイヤーなどの比較的バックコートへの帰陣が遅れるプレイヤーが帰陣する過程において意図的に牽制やインターセプトを狙ったと考えられる。また、速

攻において素早くボールを展開しようとする攻撃プレイヤーは、第2陣へのパスが意図的な牽制によって遮断され、最短距離の移動ができず、遅攻への移行が行われたと推測される。さらには、この局面において積極的防御の生起数が103に対し、消極的防御は648であったことから、学生カテゴリーの上位チームのほとんどが攻撃権喪失後、素早く帰陣する戦術を採用していることが明らかとなった。

表5 第2陣に対する防御と速攻最終結果

| | 防御成功 | 防御失敗 | 総計 |
|----------|-------|-------|-----|
| CP-積極的防御 | 80** | 23** | 103 |
| CP-消極的防御 | 406** | 242** | 648 |
| 総計 | 486 | 265 | 751 |

(** $P < 0.01$, * $P < 0.05$)

⑤展開時のボール保持者に対する防御の動きと最終結果の関係(表6)

残差分析により展開時の「パスコースを防ぐ」動きと速攻の最終結果の関係において防御成功と防御失敗の2群に有意な差が認められた($p < 0.01$)。ボールを獲得した攻撃側チームは、防御側チームの陣形が整う前に前方にいる味方に素早くパスをつなぎ、効率よく得点をしたいと考えている。従って、防御側チームは、パスが入る場所を予測し、防御することで速攻の遅延を図っていると考えられる。

また、「パスコースを防ぐ」ことで速攻防御の成功となったことについては、比較的相手陣内近くで守備に入る際、パスコースを優先的に守ることが有効であると言える。反対に、防御失敗においては、攻撃側が防御側の意図を瞬時に読み取り、ボール保持前にスピードを落とさず、タイミングよくスペースに動くことで、「パスコースを防ぐ」行動が数的優位

状況を与えてしまうリスクであることも考えられる。加えて、「ボディコンタクト」の項目において統計上有意な差は認められなかったものの、「コート中央から外側に追いやる」、「シュートコースを防ぎパスをさせる」よりも比較的高い値を示したことから、速攻展開時における防御手段の一つになると推測される。

表6 防御の動きと速攻最終結果

| | 防御成功 | 防御失敗 | 計 |
|-----------------|------|------|-----|
| コート中央から外側に追いやる | 34 | 27 | 61 |
| シュートコースを防ぎパスさせる | 14 | 15 | 29 |
| パスコースを防ぐ | 80** | 17** | 97 |
| ボディコンタクト | 81 | 49 | 130 |
| 特になし(戻りを含む) | 296 | 175 | 471 |
| 計 | 505 | 283 | 788 |

(** $P < 0.01$, * $P < 0.05$)

⑥速攻展開時における臨時防御と速攻最終結果の関係(表7)

速攻の種類を選別する項目として、「1次速攻」「2次速攻」「3次速攻」を設定したが、「1次速攻」および「2次速攻」の局面では、防御側チームが完全に帰陣する前に攻撃完了することから、「3次速攻」および「速攻から遅行へ移行した局面」を抽出し、分析した。また、戻り局面において、防御側チームが帰陣し後方防御を行っている臨時防御をLow、中盤防御と後方防御を行っている臨時防御をMiddle、攻撃権移行直後から何人かのプレイヤーがバックコートで防御を行っている臨時防御をHighと分類した。臨時防御の群分けは以下に示した。

Low…6-0-0

Middle…5-1-0, 4-2-0, 3-3-0

High…3-0-3, 4-0-2, 5-0-1, 3-2-1, 4-1-1

これらを踏まえ、速攻展開時における臨時防御と速攻最終結果との関係において有意な

差が認められなかった。この結果から、high群による防御（積極的防御）は速攻を防ぐために有効な手段であると言えなかった。また、Low群の生起数が253なのに対し、high群の生起数が106と少なく、学生カテゴリーにおける上位チームが積極的防御の戦術を推奨していないことが考えられる。

表7 臨時防御と速攻最終結果

| | 防御成功 | 防御失敗 | 総計 |
|--------|------|------|-----|
| Low | 193 | 60 | 253 |
| Middle | 111 | 39 | 150 |
| High | 82 | 24 | 106 |
| 総計 | 386 | 123 | 509 |

VI. まとめ

本研究は、速攻守備局面において積極的な防御活動推奨の立場に立ち、その有効性を検討することを目的とした。さらに、積極的防御活動が相手の速攻に及ぼす影響について明らかにすることで、新たなゲーム戦術指導論確立の一助となることを目的とし、大学カテゴリー上位チームを対象に調査を進めた。

調査を進めていく中で、いずれのシチュエーションにおいても積極的防御の生起数よりも消極的防御の生起数が圧倒的に上回っており、学生カテゴリーの上位チームのほとんどが攻撃権喪失後、素早く帰陣していることが明らかになった。このことが国内ハンドボール界において速攻防御が未発展の分野であることを象徴している。

また、ボールを保持する前の Second Player への防御、第2陣への防御、展開時のボール保持者に対する「パスコースを防ぐ」動きと速攻最終結果（防御成功、失敗ともに）の関係において統計上有意な差が認められた。いずれのシチュエーションにおいても、牽制やイ

ンターセプト、パスコースを防ぐ動きなどボールを対象とした防御であることから、比較的相手陣内近くで防御する際、優先的に「ボールを対象に防御をする」ことによって、速攻を中断させたり、遅行への移行がされることが明らかになった。反対に、攻撃側が防御側の意図を瞬時に読み取り、ボール保持前にスピードを落とさず、タイミングよくスペースに動くことで、ボールを対象とした防御活動がかえって数的優位状況を与えてしまうリスクであると考えられる。このように、積極的防御の利点や欠点を整理し、現場の指導に生かす必要がある。

今後、速攻の局面における積極的防御活動の戦術を発展させるため、ボールの所有転換原因別による積極的防御戦術を整理することや、攻撃側プレイヤーの動きの違いによって「ボールを守る（パスコースを防ぐ）」べきか「(ボディコンタクトなどにより) 攻撃側プレイヤーの動きを止める」べきかの技術の整理が必要であると考えられる。

VII. 引用参考文献

- 1) H.Döbler・谷釜了正訳(1985)球技運動学。不昧堂出版
- 2) 大西武三(1997)ハンドボールのゲームにおける局面の構成について。筑波大学体育科学系紀要, 20:95-103
- 3) 佐藤靖(2000)ハンドボールゲームの戦術の体系化について。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 22:41-60
- 4) D.Constantini・大森北寛, 藤林文博訳(2003)積極的防御の研究(フランスの防御)。Tactics of handball in the World, 1:251-253
- 5) I.Kunst-Ghermanescu・木野実, 杉山茂監(1981)ハンドボールの技術と戦術。ベースボ

ールマガジン社

6) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書

1. 2. 3, 大修館書店